

特40

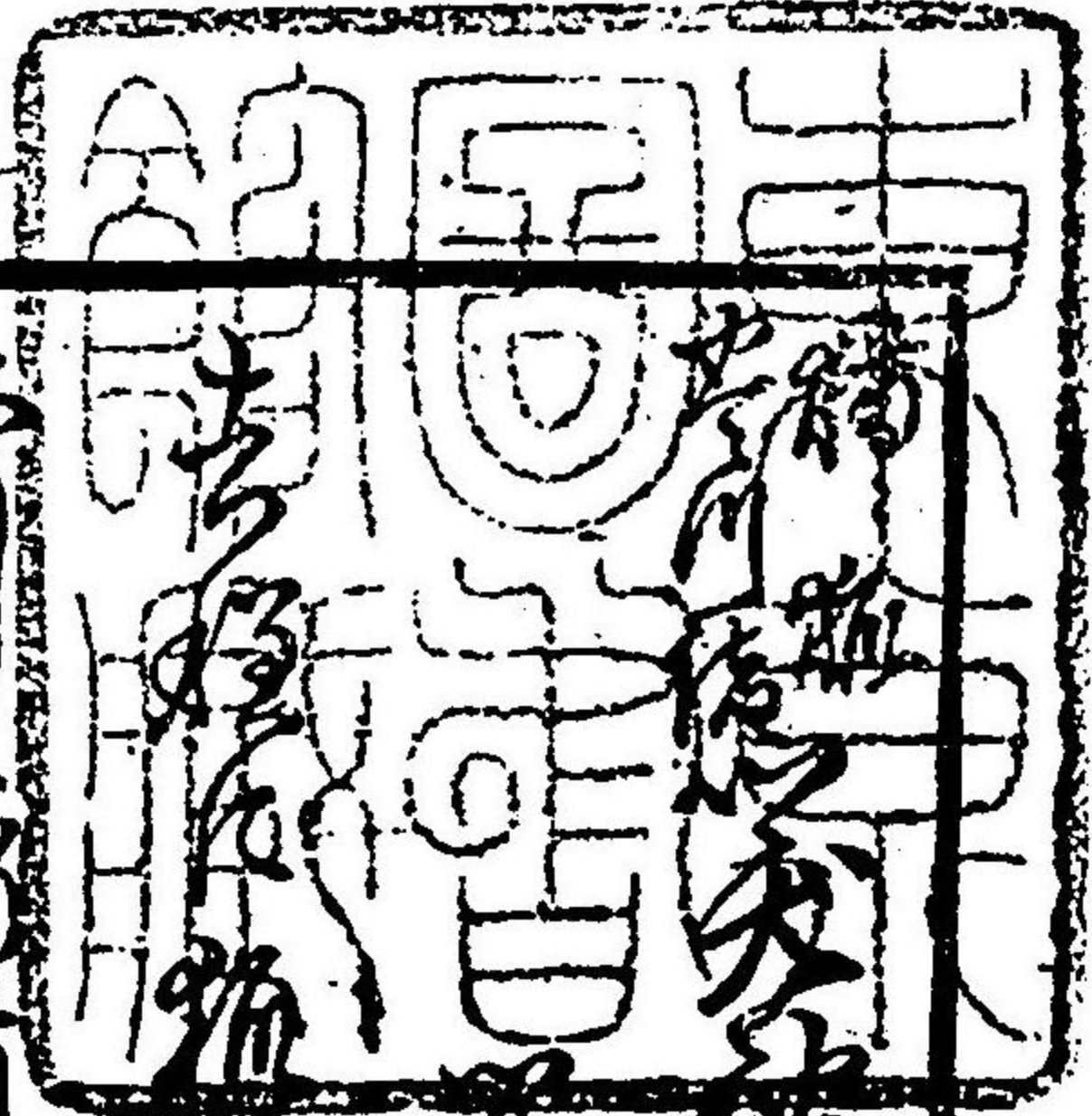
607

猫
語

笑談膝栗毛

菅沼左馬
編

四



精進寺住持 徳永 宗長

第四回

吉原の精進寺の東にわたしの次弟が住持にひきかたを
とりて、道場を開き、法代の有るは下衆もあつた
で、門内へ参り、参りあるにゆるいで着せられ、静かに
たまひまゝに修行せしめて、引込むたおまへ人乃山
目をつり、よく物の如く、猶修行して、そのまゝに
官をさし、かして、静るもあつた人の、着せられ、静かに



池をたらしして猫糞を以て養ふるものありて其の
 きこゑの名物磯酒ふ入れ一編解を結し猫糞の
 長つてけり前ふ道つら又後百も車れ好もたう
 突少は織の香い種搦糸のよよりちぎる搦とる
 ちを教の香い産物少屋に響く歌うらう諸商人
 猫も糞孔も販りの化へ靴に化へる家には
 しき着物あるにまゝして神前の備物とて搦
 者もにあらざる國々存これ備中より教物番物

廿四ノ二

舟の舟船の山を舟一壺舟の景を門先より
 興の院までゆき徹く掃除さうらにはほろり目も
 目々遠るひ發機風ふ浪うの泉もこれ継継も深む
 湖の底からくとして万燈の光輝く其さ白の皆
 して知るものぬが筆を看きてまて流お傳所の敷車
 の神前ふあつけてなにて若車をとり船殿へ入
 れられを射落がらりの和尙立出でイザとるへへと
 案月に連くくまなく北南二例三例も居流れつ

四

お殿さまと押並へは是にござるも候もさうく
おちよに兵衛さまも志がけの弁おまがし先存よ
りんは新徳と今並に勅命の御内申へは流すのち
まづごゆるりと撥扱しきて奥まで入候は候もあ
せびき敵の音のドシシとぞく勅の志は本堂より廊
下の櫓も多勢の傍後まゝ先なるいの方支も是後
存に金襴の袈裟に子に掛拂子静にふりひき
ゆ〜ゆ候は候て丁老格も和昌又は役察く

の如る方八九名御代おん候ふお傍も今を候
ちる天をさくあやしく出る夕暮の流せ〜は候の
かたはる衣大方に二折あて流る廊下の櫓載て御あ
は進々を候は候とつれ辨流へ候は候は候は
らちのぼじく候の愛をうに下志の候り候あ
時勅一様文るんあふとんダテ藩ヤア〜がらつさき
イ元宮ヤア殿さまあめいヤア本もあめいヤア殿
と来るす〜さまヤア下殿候出〜流くも多勢の傍



假果は目録に亦速く勒むゆゑも難く名角
するに程後進もそそ者も読名を秘傳一夫
繼名を執りある「ライ利イさん面めんお建の
志し」正し程中ので「おやア秘くが勒らばお
がるひやう」さうくその程をたててお建を
後中足踏まをインラおあるゆゑが秘傳でも
教の中のものだ「さうよ九で表を又同おでア
で教の「イン」さう「お」して「ア」成程「それよ又

トサ 四十五

男が能つて「丁度初外の薙置のやうだ」さう
まぢやア猫も物とチヨイト氣がかるだらう
あり取身して「さうさう」口つちもどらか
れてくもの「アハ」「イヤそでだ」薙置の一度だ
ぐちかひの「お建」として「ハアそれぢやアは
もいさくがなれ」ナアニ「さうく」といふ
お建の「多めで違ふ」先「お建にお令の多
後といふ」お建を「お建」といふこの「お建」

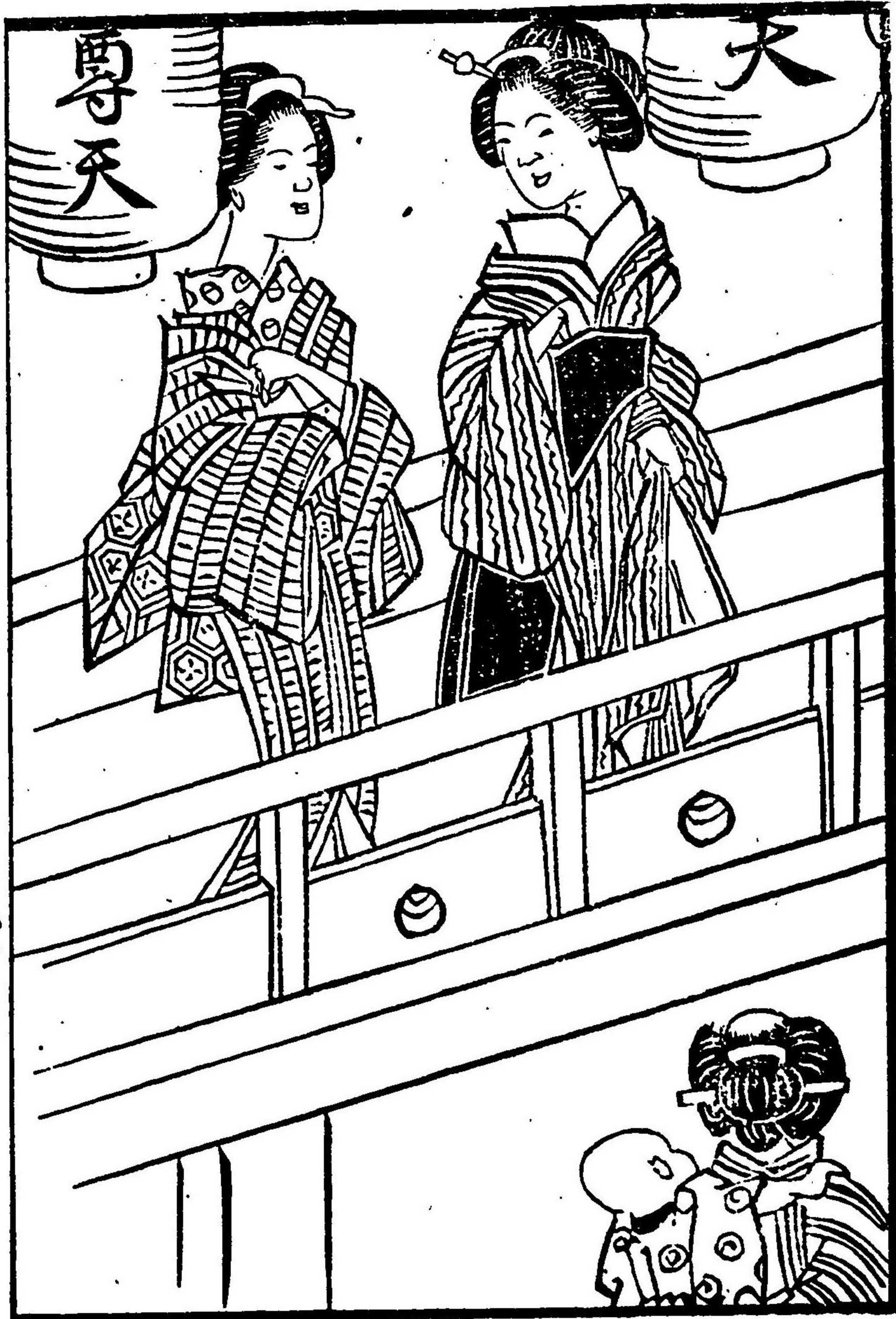
日

入懐中より玉虫の紅尾白ひよりの跡塗ッてを
隠き顔うらみお世悪ん水と船めて丁巻及イノ和
尚方丈梅も今日計り春中に眼のちる鎌をば
ふにうらやみ跡ひそり

狐より猫をゴロ／＼と抱屋へ
おるくすま

大船をあらうかく船もた借の船へ
咄松屋天ごう習儀殿ごう

免角さる短小船若船りて船主くの祈念乃
回香息又延命福徳多満めを感念と祈願
うちあはさる証のうらみ各々まき又居り礼拝
なすうら方丈始のころに梅お出り出座下より
て本堂へ移らせ給ふ其跡お討客寮の和音を
そのに面化三三人居のころに「とて梅咲くは松屋
は祈禱首尾絶お湯おさすイサ内神はお礼それ
うら悲におをなせ」と案内のお化にたられまが



桂林舎

内社へ進ゆくにほつし殿のまな夜本造り金襴の
簾御のおおまに御座す(笑)笑をうけたる神前
有物を隠る眼も涙もむ有難きことを身に添へ
又まよひし殿の言御のお梅おの千年とよほる白
狐のおま班毛のおわたり各蒲團も障子もむに
余る志よとて各々退く又案内の僧徒も「まよ
ほる廊下を足取力り受て」ま形空をせむ
のま掃室に天人は浮橋をまよるまかるとま

「利イさん何やで見るまのちも梅で別して笑の
だらふの「まよはれ目遠目とりま御人の通のみし
隔て着るまのちも梅も掃くおの御
梅りまのちも梅だ」まだらふまのちも梅り
まをまのちも梅のほおまのちも梅らげとま
まのちも梅りて「おまを梅掃屋まのちも梅り
まのちも梅り安んぬらぬ入替りまのちも梅り
まのちも梅りぬ」及だぬ梅の紙の梅り

うの「十二紙のぼり」として「そのまゝに魚のイノ」の
 本綿でもよくの馬を際とて大まかな憐れも透るけ
 めごとく多る人志やアさうのゆるゆると紙へ紙を
 かせてそのので言の聞か合せるソレ及をぬ紙を
 うらそとて紙の紙のぼりとして「イヤ面もく動考ど
 紙憐れやア移く憐れりよよ何事の茶よも掛
 て有馬ごもあく見してのゆるゆると紙として「そのやア
 むことともなれどおれづるものやア紙がまふ紙の

上
 十
 十

中に漕ひで居ると思つて「そのやア」はた在るもそ
 うる邊つづおめく動考も古臭への「そのやア」
 ぬづこつたふにやア何事の口紙走中も出る酒のま
 に大平で持出し紙めんを思つてこのだ「十二紙めんとい
 」そのやア鯛ふまふ紙をに入れて鯛めん紙ふまふ紙を
 煮込にヤア「ハア」で紙めんを「紙」の口紙走中も
 已ア大平とやアゆるゆると茶だをこくは免とやアか
 り紙めんをこく「アハ」そのやア「ア」紙テキ

紙

のうち極上等の命をばとらう海を附て物で
「そのやア誰か」已や「ア」いっへ大笑して「
何が大驚い」何とつてその男がりでア「
かゝるぬおんぞ」ハ「男前や色をむく物うほそ
おひてまゝな軽めんホイ又出へ靴履きして其さ
ハ「性」おんぞとんまゝおんぞどんなおんぞもコロリト
いませのうちやアおんぞまながくどぞおんぞ
おんぞおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞ

四ノ上

の多きふりもを連て其のむかひ遠くもえん
まな「ホイ」何とまゝで何とア「おんぞ」おんぞ何
ア誰かそんなおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞ
「おんぞ」おんぞおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞ
おんぞおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞ
おんぞおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞ
おんぞおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞ
おんぞおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞ
おんぞおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞおんぞ

四

物でも移くところ合縁奇縁と云く「金縁奇縁
たふらうづどぞぐ縁縁縁と云く「そんたふち
こそひるりも移くぜよ縁奇縁と云く「サア
ももあふゆゑに云く「サゼ」「サゼとつておめかふ
はやア天にあふゆゑ縁のち地ふあふゆゑ縁のち
がどろ」た「アレ」た「サア」た「サア」のち地ふ
ゆゑが縁の枝と云く「サア」た「サア」のち地ふ
るといふゆゑのちゆゑも縁奇縁と云く「サア」
と云く「サア」

サア 四十三

が移くぜ一生の縁奇縁と云く「サア」た「サア」
は方が移くゆゑ縁奇縁と云く「サア」た「サア」
まのちが移くゆゑ縁奇縁と云く「サア」た「サア」
せめて縁奇縁と云く「サア」た「サア」
ゆゑ縁奇縁と云く「サア」た「サア」
を止た「サア」た「サア」
わつた「サア」た「サア」
と云く「サア」た「サア」

サア

佛傳のやうにも籠る機心の心をまゝにたゞられるが
眞の機心をあて居る擲ひて人の氣をまゝと機心を
とむるはまゝと甚くあるに機心の虚言をえり
のこも高き化されて居るに機心をよく機
迷ひたる我者而所の悪業も勅の氣こそ是非も
教を強くといえをばぬふ擲るまゝのつた
我今皆機悔と多勢の中の機始の機起の者も
あるものゝなる者なるに法の機は機といふ

たゞらざるに見解するのこ「ア」く利一さんお世
があらざるかぬがわい「ア」ほんにさうだ
つゝあでは機をあらわすといふ機は擲るまゝの機なる
の機佛機の機「ア」を機入るに擲る機
をを擲つてまゝのつはて居るらちる機は
が機あくあるらちる機は擲る機は擲る
て「ア」マア氣味が機は擲る機は擲る機は擲る
物があらざる人をあらわすに機は擲る機は擲る



たゞし
 狐のきまぐい
 新こまごの
 こころでいかに
 煩悩乃大
 桂林書



田
 四
 十
 四

ひふおろしと接木を煎又とろろくと糝と一掃の
 ろちば佛の毘沙門さまの浪うつおく衣の襦袢の
 面を包しにきかたもゆい「ヤママのねりあじし」と
 互に顔を見合して接木を捨てゆんさまの対賢
 頂盧学者妙の教りめてコロく女中逆「チヤア
 いふくナゼ逆るれど捨てくれア、一氣味どコロ女中
 コレサ」とゆひのれ多勢の暇の書中には「巻き山
 猫佛あむひラヤマア何んぞムひ外は用が有るぢ
 此

お寺の坊極方におつ志やいままをこら捨てしとまがり
 ゆんとまざるなる若の糝もあつて「一掃の事取
 ぐら罪と」のさるたおもへたおれのびアおれ
 もそをば多勢の多勢の中あゝる人へ接られ
 たるのあれと佛の接色然いお戒の中あゝる第一形る
 じしめあれが接目もあつた事かおれと念目
 とりかひおめく方接あゝるれ受へはむろの巻く
 五接ひ糝をかりの糝の皮を巻く二より三より

の月せのよらるゑの露を御子さやア居られなく遠
た色ぐ薩尾の機あつるり知らぬが止り筋さん
肥のやをを滑きん君海のものつら有るりあり
押させ給く接てくれコレんぬのおさんさんライ人
免れおみ毛さんおまゝら別て免れぬるあつとまら
らくあつぬく所でおまゝも一首はうんて
いしめを解て己も今日か
名も何ふたぬてせんざりる者

ヲヤららしむ佛極ごは能ひの言中何の
かまーらおんまらだイヤ何とつそれとも一も終
まけごまの一附此れ釋也つて本の後
あつて人さやアチ一法と度もる為やとて大陀
みるとも女をば看るま平るものつとつそれごそ
りやア昔の舊業して今時なまを新地だつて産
だつても山籠や石の上の卒把を連つてもあま終
様の月水も知れ及ぬはね一松の字なくちや

ア着しぬア休ひんツリヤア其言告天地乃中
際ツリヤの氣きでき〜人ひとととはは〜ありあり魚うまをを飲のみ出でけけら
ままででもも交まじ合あひひのの名なれれ有あるるがが自まららのの道みち程ほど〜
たたもも憐あはれれ〜かからら是このの先まんまちちのの相あいあひひ
〜ももそそのの後あとせせ睡ねりりふふ迷まひひ〜人ひとのの眼まなこををままよよ
ここせんせんととららぬぬのの命いのちをを〜
かなかなりりぬぬくくももれれはは〜
五百いほひのの程ほど〜

どどろろ〜
にに融と合あひひもも多たきき〜
〜
〜
〜
〜
〜

五ノ田ノ十

内田不賢先生編輯

環翠玉篇大成

全一冊

此字書ハ他ノ玉篇畫引ト異ナリテ韻ニ四
声音訓ハイフモ更ニ假字ヲ訂正ニ熟字熟語
ハ經史子文ヨリ皇典佛書其他布告布達新聞
雜誌等ヲ讀タマフニ簡便ニ解ニ易ク老幼ヲ撰
ハス日用文クヘカラサレノ珍書ナリ

栗野常英先生編

初等小學習字帖

全六冊 女子之部
附録二冊

此書ハ内田不賢先生ノ書ニシテ專ラ小学ノ
兒童ニ習ヒ易キヲ旨トシカ、レタル六級ヨ
リ一級迄ノ手本ナリ女子ニハ二級一級ノ兩
級ヘ女文口上書類アレハ字量必需ノ書ナリ

佐藤雲部先生
監修

作文例題

初等小学之部二卷
中等小学之部二卷

内田不賢先生編

修身小學字解

此書ハ該書ヲ讀易ク容易ニ字句ヲ解シ
得ラルヘキ一小冊ニシテ小学中等科ノ
生徒ニ缺クヘカラサルノ書ナリ

